

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 30 日現在

機関番号：34202

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370385

研究課題名(和文) 悪魔像の文学的系譜 グノーシス主義との秘められた対決

研究課題名(英文) The poetic genealogy of the Satan. Confrontation with the gnosticism

研究代表者

高橋 義人 (Takahashi, Yoshito)

平安女学院大学・国際観光学部・教授

研究者番号：70051852

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：悪魔の表象を知らなければヨーロッパの真の顔を理解できない。ヨーロッパの「悪魔の肖像」を浮かび上がらせるべく、本研究の担当者3人(Dieter Trauden、久山雄甫、高橋義人)は定期的に会合を持ち、中世から18世紀にいたるテキスト(中世ドイツ語、ラテン語等)や研究文献を精読し、ドイツ語で議論を交わした。その結果「キリスト教とグノーシス」「墮天使ルチファー」「エヴァと原罪」「テオフィロスの芝居とマリア信仰」「魔女 唯名論の問題提起」「トリスタン物語と12世紀ルネサンス」「エラスムス対ルター」「人間の根源悪 ヒューム、ルソーからカントへ」等の諸問題をかなりの程度明らかにすることができた。

研究成果の概要(英文)：Without knowing the images of the evils, we can hardly claim to understand the true profiles of Europe. In order to conjure up the "portrait of the Satan" the members of this research project (Dieter Trauden, Yuho Hisayama and Yoshito Takahashi) regularly met and extensively read the texts from medieval ages to the 18th century (in medieval German and Latin) as well as research literature, and rigorously exchanged our views in German. The researchers proudly report that they now have fairly clear understanding of the implications presented by the following topics: The Christianity and the Gnosis, Lucifer, Eva and the original sin, the Drama of Theophilus and veneration of the Virgin Mary, witches and the criticism by the nominalism, Tristan and Isolde's love and the Renaissance of the 12th century, Erasmus contra Luther, Kant's Radical Evil contra D. Hume and J. J. Rousseau, etc.

研究分野：ドイツ文学・思想

キーワード：悪魔学 キリスト教 グノーシス 墮天使 原罪 普遍論争 自由意志論争 根源悪

1. 研究開始当初の背景

H・ブルーメンベルクによれば、西欧の精神史は終始一貫してグノーシス主義(善悪二元論)を乗り越えようとする試みであった。本研究のひとつの眼目は、代表者の2005-2006年科研費研究「グノーシス主義と近代ヨーロッパ文学」や著書『魔女とヨーロッパ』(2012)の仕事を引き継ぎ、ブルーメンベルクの主張を文学上のデモノロジー(悪魔学)に即して裏づけようとするにある。

キリスト教はグノーシスの影響の下に神と悪魔の二元論を唱え、その教義の中核にデモノロジー(悪魔学)を据えるにいたった。悪魔が存在することを証明するために、キリスト教は墮天使、原罪、魔女等の諸観念を生み出した。しかしもしもそれらが嘘だとしたら、キリスト教およびキリスト教に主導された西欧の歴史はことごとく誤りだったということにはならないだろうか。

この問いが本研究の大きな背景をなしている。

2. 研究の目的

キリスト教の中核にデモノロジーがあることを知らなければ、西欧人の思考の本質に迫ることはできず、かつそれが誤りだったと明らかにしなければ、ニーチェによって始められた西欧精神史の批判的研究を完成させることはできない。本研究は、キリスト教誕生後、中世や近現代において肥大化していった西欧の悪魔像の変遷過程を、西欧(特にドイツ語圏)の文学・文化をテキストとしながら具体的に明らかにするとともに、それによって西欧精神史の根底にある虚妄を暴露することを目的にしている。

3. 研究の方法

研究代表者と分担者の3人(高橋義人、Dieter Trauden、久山雄甫)は、悪魔に関する初期教父の著作、中世の復活祭劇などをラテン語原典、中高ドイツ語等であらかじめ精読した上で定期的に研究会を開き、問題点・不明点についてドイツ語で討議した。その研究結果を各自がまとめると同時に、代表者はそれを1冊の本(『悪魔の神話学』岩波書店、近刊)として発表し、広く読者に、デモノロジーによって主導された西欧精神史の虚妄を知らしめようとしている。

なお研究代表者・分担者はゲーテ自然科学の集い例会(毎月開催)にも欠かさず参加し、参加者の一人の影浦亮平(京都外国語大学講師)から、近代における原罪説の強い擁護者であるド・メーストルの思想を教えてもらった他、ドイツにも出張し、Gernot Böhme 教授(Darmstadt 大学)や Wolfgang Braungart 教授(Bielefeld 大学)とも討議し、多大の示唆を受けることができた。

4. 研究成果

(1) 悪魔の恐ろしさをキリスト教ほど強調

している宗教、悪魔の存在がキリスト教におけるほど大きな役割を演じている宗教は他にない。ところがそのような恐ろしい悪魔は、もともとキリスト教にあったものではなく、キリスト教の形成史において徐々に作り上げられていったものだった。特にグノーシス主義がキリスト教に与えた影響は大きい。

(2) グノーシス主義文書のひとつとされる「トマス福音書」とカトリックとでは、「神の子」の捉え方が決定的に異なる。マルコの時代において「神の子」という表現は、「神の祝福を受けた人の子」というくらいの意味だった。つまりイエスは「人の子」として捉えられていた。ところが「ヨハネ福音書」の作者は、イエスは人間ではなく、「神の言葉」が人間の姿を取った者であると考え、その意味で「神の子」の語を用いた。そしてその後、人々は「ヨハネ福音書」の観点から「マルコ」「ルカ」「マタイ」を読むようになり、そこに出てくる「神の子」は「神」とほぼ同義として解されるにいたった。

ところが「トマス福音書」は、「ヨハネ福音書」とはまったく異なるキリスト教をめざしていた。ヨハネとは違い、トマスは、イエスのみならず、われわれのなかにも神はいる、われわれもまた天にまします父の子である、と主張しているのである。

「トマス福音書」にはもうひとつの側面がある。それは、神のみならず、悪魔の存在を重視する二元論的側面、悪魔の存在を重視するグノーシス主義的側面である。

「ヨハネ福音書」を支持するエイレナイオスらの初期教父は、「トマス福音書」やグノーシス主義を論駁しなければならなかった。その際にエイレナイオスは、「神と悪魔」という二元論的図式を持ち出し、一元論を守ろうとしながら実際にはグノーシス主義的二元論に陥ってしまった。彼を引き継いだテルトゥリアヌスやアウグスティヌスは「原罪」説を唱えた。それは、この世は悪であるというグノーシス主義のテーゼに明らかに近い。こうしてキリスト教は、表面的には一元論を唱えながらも、実質的には二元論の立場に立ち、「悪」や「悪魔」の概念を駆使した形而上学をひたすら追求していった。以後、デモノロジーはヨーロッパ精神史の隠れた水脈となり、この世には神と悪魔の両方が存在するという教義、グノーシスの二元論思想とさして変わらぬ教義が広まっていった。

(3) 墮天使をルチファーと同一視し、悪魔の存在論を神学的に展開したのは、タティアノス(? ~ AD170)とオリゲネス(AD182-251)だった。彼らの説がテルトゥリアヌス以降のキリスト教徒にとって特に好都合だったのは、それが、「神は善である」というキリスト教の教義と、「この世に悪は存在する」という否定しがたい現実のあいだの矛盾を解決してくれるものだったからである。

タティアノス＝オリゲネス説はキリスト教正統派によって支持され、ここに「ルチファー＝墮天使＝悪魔」という定式が成立した。

オリゲネスは万人救済説を主張し、悪魔さえも最終的には神によって救済されると考えていたが、この説はカトリックでは支持されなかった。もしも悪魔が許されたら、この世から悪はなくなるはずだが、しかし現実に悪はなくなっていないからである。そこでオリゲネスはキリスト教正統派の激しい攻撃を受け、ついには異端視されてしまった。

神が最終的には悪魔を許すというオリゲネス説とは違い、アウグスティヌス以降のキリスト教では、神と悪魔は永遠の敵対関係にありつづけることになった。こうしてキリスト教徒は、一方では自分たちは一元論者であると主張しながらも、他方では神と悪魔を明白に対峙させ、ここに、かつて否定したはずのグノーシス主義にまるで迎合するかのようになり、神と悪魔、善と悪を完全に二元論的・存在論的に把握する宗教が誕生した。それは、一元論の衣をまといながらも、形而上学的な二元論を核とした宗教の誕生だった。

(4) 初期キリスト教内部では、キリスト教グノーシス派(ヴァレンティヌス派)とテルトゥリアヌス(160頃～220頃)ら(後にキリスト教正統派となる一派)との対立が深刻だった。魂はもともと清らかだと考えるグノーシス派からすれば、穢れているのは肉体や物質だった。それに対してテルトゥリアヌスは、人間の魂はことごとく穢れているがゆえに、その穢れは洗礼によって清められなければならないと考えた。では、なぜ人間の魂は穢れているのか。テルトゥリアヌスによれば、それはアダムとエヴァが原罪を犯したからで、しかもこの罪は「伝達の原理」にもとづいて子孫代々伝わるという。後にこの罪は「原罪」と呼ばれることになった。

テルトゥリアヌスが唱えた原罪説は、伝達の原理(遺伝の原理)とデモノロジーを2つの柱としていた。魂のなかにはサタンが住んでいると考えたテルトゥリアヌスは、洗礼を重視した。洗礼によって魂のなかからサタンを追い出さなければならない。そう考えた彼のなかでは、原罪説と洗礼の神学とデモノロジーの三者が一体化していった。テルトゥリアヌスは原罪説の創始者であると同時にデモノロジーの布教者だったのである。

アウグスティヌスはテルトゥリアヌスが創始した原罪説をさらに確固とした教義として確立する必要に迫られた。というのも、彼の時代には、ペラギウス(AD 350頃～420)の教えがキリスト教徒のあいだで強く支持されていたからである。ペラギウスによれば、本質的に善良なものである人間は、アウグスティヌスが主張しているような恩寵の助けがなくても、その自由意志をもって善をなすことができる。原罪説は人間のなかに悪を持ち込むもので、それはマニ教やグノーシス主

義に近い。そう言ってペラギウスはアウグスティヌスを強く批判した。

原罪説論争は、アウグスティヌス派のペラギウス派に対する「政治的」勝利によって終わり、以後、原罪説は欧米社会における「真理」となった。当時、アウグスティヌス的真理とペラギウス的真理の二つが対立していたが、結果的には政治的に「勝った側の真理」が「負けた側の真理」を駆逐してしまい、そのため原罪説は今日でも西欧社会を支配する「普遍的な真理」となるにいたった。

アウグスティヌスによれば、この世に生まれてくるすべての子供は、性交を行なう両親によって罪を遺伝させられ、それゆえ永遠の断罪を受けるべく定められている。その際、セックスは原罪が遺伝させられる手段となっているという。

アウグスティヌスがこのような教義を確立したがゆえに、西欧の人々はそれから永いこと身体とセックスが蔑視される世界に生き、罪の意識に苦しまなければならなくなった。そしてこの教義の中心には女エヴァがいた。アウグスティヌスにとって、

「罪、セックス、女」=不浄な三位一体をなしていた。東洋においては女性の誇りとなり、女性の持つ力の源でもある分娩は、こうして西洋では悪に染まったもの、罪が遺伝する手段と見なされてしまったのである。

(5) キリスト教は、一方では女性をエヴァ(原罪を犯した張本人)の子孫として蔑み憎む反面、他方では女性を聖なる存在として崇めてきた。後者の象徴が聖母マリアである。

聖母と魔女という極端な二項対立には、キリスト教のなかにある神信仰と悪魔信仰(デモノロジー)が反映されている。もしもキリスト教が女性蔑視の宗教だけで、聖母崇敬を欠いていたならば、数多くの女性信者を獲得するのは難しかったであろう。マリア信仰を抜きにして、世界宗教としてのキリスト教について語ることはできない。

マリア信仰を広める上で大きな役割を演じた中世の芝居がある。650年頃、東方教会で誕生したテオフィロス伝説である。評判になったこの芝居は、やがてカール大帝に仕えていた神学者パウルス・ディアコヌスによってラテン語に訳された。すると、このラテン語版はヨーロッパ中西部でも上演されるようになり、12世紀以降、ドイツ語版、英語版、オランダ語版、スペイン語版、イタリア版の『テオフィルスの芝居』が次々と誕生した。

テオフィルスは市民から敬愛され、司教になることを確実視されていた。ところが司教に選ばれたのはテオフィロスのライバルだった。この男は司教の座につくと、彼を失職させた。そのためテオフィルスは無職の哀れな貧乏人となってしまった。

途方に暮れた彼はサタンを呼び出し、多量の金銀と引き換えに自分の魂を与えるとい

う契約書に署名する。サタンはテオフィルスとの契約書をルシファーに渡す。

その後、テオフィルスはたまたま或る司祭の説教を聞いて改心する。悪魔と契約した自分を助けてくれるのはマリアしかいないと思った彼は、彼女に救いを求める。彼の願いは撥ねつけられるが、なおも彼は必死にマリアに食い下がる。そこで繰り広げられるテオフィルスとマリアとイエスのやりとりは、裁判における検事と弁護士の議論に似ている。この芝居の各国版が誕生した 12 世紀は裁判形式が整いはじめた時代で、それがじつはこの戯曲にも反映している。

マリアがイエスに対して展開する議論は、中世のキリスト教徒にとっては十分に説得力のあるものだった。当時の一般の人々はラテン語で書かれた『聖書』が読めないため、イエスの生涯を教会内の一連の絵画を通して学ぶほかなかった。そしてマリアが言う 5 つの苦難の情景は、これらの絵画のなかにならず描かれているもので、これを見て信者たちは共感の念 (compassion) を覚えた。ちなみに共感の念 (compassion) とは、イエスやマリアの受難 (passion) を「共に」(com) 味わうという意味にほかならない。

他方、イエスはテオフィロスが悪魔と交わした契約書にこだわる。このくだりには、ゲルマン法からローマ法へと移行しつつあった 12 世紀当時のドイツの法制度が大きく関係している。基本的に慣習法であるゲルマン法では成文による法令を必要としない。ところが神聖ローマ帝国の領土が拡大するとともに、成文法であるローマ法が次第に導入されるようになった。そのため、以前は口約束で済んだ契約も文書化しなければならなくなった。そういう時代の変化が、テオフィルスと悪魔との契約にも表れている。

サタンは、まるで検事のように、テオフィルスは契約して自分を売ったのだから、彼を救おうとすることは不正だ、と主張している。それに対してマリアは、テオフィルスが悪魔と契約したとき、彼は望んでいた司教への道を断たれ、無職の貧乏人となって、心神喪失の責任能力を欠いた状態にあった。彼がそういう状態にあることを知って悪魔は契約させたのだから、この契約は詐欺に当たる。これは契約無効事項のひとつで、テオフィルスの弁護を買って出たマリアは、それを論拠にして彼の無罪判決を勝ち取るのである。

「テオフィルスの芝居」の主題は、悪魔との契約とマリア信仰にある。この伝説は、魔女狩りの嵐が吹き荒れる前の 7 世紀から 12 世紀にかけて中世ヨーロッパに広まった。ここでは、悪魔と契約した者ですら、マリアにすがれば救済されることになっている。

悪魔と契約するほど恐ろしい罪はない。テオフィルスはそのような重い罪を犯したにもかかわらず、マリアの慈悲によって救済された。ならば、自分がどうして救済されない

ことがあるか。人々はこの芝居を見ながらおそらくそう思ったにちがいない。

人々がそう思ったからこそ、この芝居は大きな反響を呼び、各国語に訳された。そればかりではない。人々は足しげく教会に通い、イエス・キリストの受難像の前ではなく、聖母マリア像を前にして熱心に祈りを捧げるようになった。つまりマリア信仰は、人々の悪魔に対する恐怖心とデモノロジーを和らげる効果を有していたのである。

悪魔はもはや怖くない。マリア信仰の重要性は、人々のこの感情を裏書きしてくれる点にあった。マリアが無原罪の永遠の処女であったというのは嘘である。しかしマリア信仰は、もうひとつの嘘である悪魔信仰 (デモノロジー) を相殺する働きを有していた。デモノロジストたちは人々の心を恐怖心によって支配しようとした。宗教改革者 M・ルターもその一人である。しかしマリア信仰はデモノロジストたちの見解の対極に位置し、人々の悪魔に対する恐怖心を和らげる役割を演じていた。マリア信仰はデモノロジーに対する貴重な防波堤として機能したのである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 7 件)

① 高橋義人、無私の個人主義——森鷗外とゲーテ、「文学」第 16 巻第 1 号、査読有、2015、223-240

② 久山雄甫、モナド・エンテレケイア・マカーリエ——ゲーテにおける「個の不滅」の問題、モルフォロギア、査読有、37 号、2015、49-77

③ 高橋義人、原発とゲーテ的・ハイゼンベルクの科学、モルフォロギア、査読有、36 号、2015、98-109

④ 高橋義人、大木沙知子、平安女学院大学研究年報、査読有、14 号、2015、61-71

久山雄甫、薔薇十字的世界史の挫折
ゲーテの『秘密』と 1780 年代、『DA』(神戸大学ドイツ文学会雑誌) 査読有、第 11 号
2015、71-88

Yuho Hisayama: „Goethes Gewalt-Begriff im Kontext seiner Auffassung von Natur und Kunst“ in: *Goethe-Jahrbuch* Bd. 129, 査読有、2013、64-74.

久山雄甫、踊るのは誰か——主体をめぐる間文化的考察、埼玉大学教養学部リベラル・アーツ叢書、査読有、第 6 号、2014、45-66

〔学会発表〕(計 12 件)

① 高橋義人、聖遺物と奇蹟——カトリック教会による捏造とその背景、第 2 回日本フンボルト教会関西支部総会、同志社大学、2016.1.17

Yoshito Takahashi: Strukturalismus in Goethes Morphologie. Goethe-Gesellschaft in Darmstadt, Literaturhaus in Darmstadt. 2015.12.16

Yuho Hisayama, „In krankem Verfall des Körpers, in blühender Gesundheit des Geistes. Zur Figur der Makarie im Roman *Wilhelm Meisters Wanderjahre*.“, Goethe-Gesellschaft in Darmstadt, Literaturhaus in Darmstadt. 2015.5.25

Yuho Hisayama, „Das phantasmagorische Doppelreich der Geister. Überlegungen zu Goethes Umgang mit dem Ideal-Schönen im *Faust II*.“. IVG-Tagung in Shanghai, 上海市・同済大学、2015.8.28

久山雄甫、ゲーテの『秘密』はいかにして未完に終わったか、ゲーテ自然科学の集い京都例会、立命館大学衣笠キャンパス、2015 年 12 月 5 日

高橋義人、森鷗外と日本の個人主義、けいはんな哲学カフェ ゲーテの会第 29 回、公益財団法人国際高等研究所、2015.11.27

高橋義人、ゲーテとルソー、ゲーテ自然科学の集い京都例会、立命館大学衣笠キャンパス、2014.7.27

高橋義人、ルソーとゲーテの文明批判 自然状態と自然宗教、慶応大学文学部(三田)特別講義、2014.6.24

高橋義人、古都の「木の文化」を守る 日独の比較をもとに、京都伝統の森推進協議会、京都大学こころの未来センター、2014.6.18

⑩ Yoshito Takahashi: Exil und Transitraum. Rousseau und Goethe im christlichen Zeitalter. GiG Colloquium in Limerick 2014, Mary Immaculate College, University of Limerick, Ireland, 2014.5.30

高橋義人、若きゲーテの芝居と兄妹愛、大阪ドイツ文化センター、梅田スカイビル、2014 年 5 月 7 日

高橋義人、原発とゲーテ自然科学、第 2 回「21 世紀国家像と産業社会」シンポジウム、立命館大学朱雀キャンパス、2014 年 3 月 27 日

〔図書〕(計 12 件)

① 高橋義人、岩波書店、悪魔の神話学、近刊、2016、約 400 頁

② Yoshito Takahashi, Fink, Märchen und Mythologie. Die Cinderella-Märchen im Lichte von Fruchtbarkeitskulten. In: Teruaki Takahashi, Yoshito Takahashi, Tilman Borsche (Hg.): Japanische-deutsche Diskurse zu deutschen Wissenschafts- und Kulturphänomenen. Paderborn 2016, 177- 186.

③ Bernd Neumann, Dieter Trauden, Fink, Vom Umgang mit Grenzen. Voraussetzungen für das Verständnis religiöser Spiele des Mittelalters. In: Teruaki Takahashi, Yoshito Takahashi, Tilman Borsche (Hg.): Japanische-deutsche Diskurse zu deutschen Wissenschafts- und Kulturphänomenen. Paderborn 2016, 91-101

④ Yoshito Takahashi, Stauffenburg Verlag, Individualismus und Hospitalität. Ein Vergleich europäischer und japanischer Verhaltensweisen. In: Akio Ogawa (Hg.): Wie gleich ist, was man vergleicht?. Tübingen 2016, 73-82.

⑤ Yuho Hisayama, Stauffenburg Verlag, Ki, pneuma und Geist. Möglichkeiten ihres Vergleichs. In: Akio Ogawa (Hg.): Wie gleich ist, was man vergleicht?. Tübingen 2016, 83-90

Yuho Hisayama: Aisthesis, „Krankheit, Spiegel und Hoffnung. Makarie als eine „geistige“ Figur in Goethes *Wilhelm Meisters Wanderjahre*“. In: Gernot Böhme (Hg.): *Über Goethes Romane*. Bielefeld 2016, 69-79

高橋義人、佐藤文隆、岩波書店、10 代のための古典名句名言、2015、計 168

Yoshito Takahashi, Peter Lang, Goethes „Idee des Reinen“ und das zenbuddhistische Nichts, In: Ernet W. B. Hess- Lüttich und Yoshito Takahashi (Hg.): „Orient im Okzident – Okzident im Orient. West-östliche Begegnungen in Sprache und Kultur, Literatur und Wissenschaft“, Frankfurt (M) 2015, 155-167

Yuho Hisayama: iudicium, „Das Faultier in Goethes Morphologie. Die „Elemente“ als Rahmen des „schaffenden Geistes“. In: Die Japanische Gesellschaft für Germanistik (Hg.): *Verkörperte Sprache – Rahmen und Rahmenbrüche*. München: 2015, S. 169-178.

Yuho Hisayama: 外研社 (FLTRP), „Zur Übersetzung des Begriffes *ki* ins Deutsche“. In: Minru Qian und Yuqing Wei (Hg.): *Interlingualität – Interkulturalität – Interdisziplinarität. Grenzerweiterungen der Germanistik*. Beijing

2015, 517-528

Yoshito Takahashi, Peter Lang, Steine, Gärten und das Paradies. In: Ernest W.B. Hess-Lüttich u. Pornsan Watanangura (Hg.): KulturRaum. Zur (inter)kulturellen Bestimmung des Raumes in Sprache, Literatur und Film. Frankfurt (M), 2013, 141-156

Yoshito Takahashi, Königshausen & Neumann, Nishida und Dilthey. In: G. D'Annna, H. Johach u. E. S. Nelson (Hg.): Anthropologie und Geschichte, Würzburg 2013, 417-428

〔産業財産権〕

出願状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

高橋 義人(TAKSHASHI, Yoshito)

平安女学院大学・国際観光学部・特任教授

研究者番号：70051852

(2)研究分担者

TRAUDEN, Dieter

京都大学・人間環境学研究科・外国人教師

研究者番号：20535273

久山 雄甫(HISAYAMA, Yuho)

神戸大学・文学研究科・講師

研究者番号：70723378